



もう南極に近い南米のチリとアルゼンチンをまたぐ形で位置しているパタゴニア地方が今回の目的地である。山としてはそれほど高いわけではなく、ことにわれわれが歩くトレッキングコースは最高に高いところでも 900m くらいであるので、氷河と奇岩から構成された山の見物が主目的になる。南米に近いところまで行くというとツアー費用もかなりのものとなり、参加メンバーは4人であった。アルパインツアーの最少催行人数は普通 10 人であり本来であればツアー不成立のはずであったが、二人のドタキャンがあったということで止めたくても止められなかったみたいだ。4人のうち1組はペアで、私ともう一人であることは事前に知らされていたが、例によってアルパインツアーのやり方は空港待ち合わせ所に行かないと

メンバーは分からない。その待ち合わせ所の成田空港へ行ってみると、ツアーリーダーの安東さんと一緒にニコニコと私を迎えてくれたのは、あの柏さんであった。柏さんは定年まで某エネルギー供給会社に勤めておられた。省エネルギーを目指したある空調機器の開発プロジェクトのリーダーを担当されていたときに、その仕事を受注した私の会社の、私も一担当技術員として参加させていただいた。そのときは柏さんが山登りをする人ということとはまったく知らなかった。その柏さんと始めて山でお会いしたのは、2年前の夏に毎日新聞旅行の北アルプス烏帽子岳から船窪小屋方面に北上する2泊3日のツアーのときであった。登っている途中で、“高橋さんですね”と声をかけられてびっくりしたものである。聞けば柏さんは単なる山好きなどという半端なものではなく、“この間は南米アコンカグワ山 (6 998m) へ登ってきました”などと言う。お酒が好きなところも私とはまさにぴったりで、今回のツアーに期待を持たせてくれる。さっそく成田空港のノースウェストのラウンジで、柏さんはマイレージがゴールドカードでお酒飲み放題ということで、事前祝勝会を開いた。

もう一組のペアの豊島さんご夫妻はやや遅れてやってきた。旅行鞆のキャスターが壊れてしまったということで、最初から縁起でもないとおつづつ言いながらやって来た。

12時間の飛行を経て、アトランタでのトランジェットに7時間半も要するので市内見物に出た。豊島

さんの提案で、地下鉄に乗って『風と共に去りぬ』の作者マーガレット・ミッチェルの住んでいた家へ行ってみる。ここには20数年前に仕事上の見学旅行のときに来たことがある。25回くらいの海外旅行経験中で唯一背広にネクタイで行った旅行であった。あの時は箸の上げ下ろしまで旅行会社がやってくれたという感じで当然のごとくバスで立ち寄っただけであったが、今回は地下鉄の切符まで自分で買った。こんなところに思い出というものは残ってしまう。



## 1. 首都サンチャゴ

成田～アトランタの12時間はまだ序章でさらに9時間かけてチリの首都サンチャゴに着く。チリへの入国審査で豊島さんが一悶着。預け入れ荷物の中にみかんが入っていたのが引っかかってしまった。農産物を持ち込むことにうるさい国や、チョコレートなど自国の産業に関するものの持込に神経質な国などいろいろあるらしい。もちろん豊島さんにみかん持込に悪意があるわけではないのであるが、税関職員にとってそんなことは関係ないことであって、みかん没収だけでは済まされず罰金\$200まで取られた。ダンボールで買ったなら何箱になるのであろうか。



旅立ち2日目でやっとホテルに泊まれて翌日はサンチャゴ市内見物。巨大なマリア像のある小高い丘の上から市内を見下ろしたり、教会の見物などを行う。チリとアルゼンチン建国の歴史は案外新しく、まだ300年に満たないようだ。2年前に行ったペルーのインカを滅ぼした後でスペイン人によって開拓されたらしいが、そのときに先住民はほとんど絶滅されたようだ。ペルーではインカとスペインの混血と思える人の割合が多かった。(インディオが46%、インディオとスペインの混血が40%)しかしチリではスペイン系が30%でその他白人系が65%というので、顔立ちはほとんどヨーロッパ系に見える。チリ全体でも人口は16百万人足らずであるので、首都サンチャゴといえども大都会という感じには程遠い。

## 2. マゼラン海峡

マゼラン海峡は南緯54度くらいになるのであろう。サンチャゴからさらにプンタ・アナレスまでチリ国内航路で飛び、さらに車に少し乗ってマゼラン海峡に出る。この日も風が強かったが、航海をする人にとっては昔からかなりてこずらされるところで



マゼラン海峡

あったようだ。記念にと海の水にタッチする。

さらに少し車に乗ると、ペンギンのコロニーといふところに案内してもらった。海岸線に沿ったただっ広い野原一面にマゼランペンギンが自然に住む公園が展開されている。尾瀬沼の木道みたいな道を人間のほうは遠慮気味に歩いて、のんびりくつろぐペンギンを遠巻きに見て回る。ペンギンの道があるところは木道を橋にして持ち上げ、ペンギンさんにご迷惑がかからないようにしている。もともとペンギンの住処を覗き見観光スポットにさせてもらっているのだから、そのくらいのサービスは当然か。ペンギンは人間に見られているということはまったく意識していないように見える。自然界の中では、襲われる心配のない相手は、人間でも木や岩とおなじに扱われるのであろうか。

車で4時間ほど北上してこの日の宿泊地のプエルト・ナタレスに向かう。内陸部をズーと走ったので、プエルト・ナタレスは湖畔のリゾート地に着いたのかと思ったが、何と湖畔と思ったのは海であった。このあたりは北欧など同様のフィヨルド地形で、海が奥の奥まで入り込んでいる。フィヨルドというのは学生時代に教科書で習ったことはあるが、実感してみるとその複雑さは想像をはるかに超える。

ツアーリーダーを含めてたった5人であるので、メンバーがお互いに打ち解けるのも早かった。

豊島さんは、元は銀行マンであったが、役員としてある企業に出向して、今はそのときの関連した仕事を行う会社を起業して、100人規模の会社の経営者であるという。しっかりした後継者も居るので自分達はこうして海外旅行にも行けるのだという。普段は今回のようなパックツアーに頼るのではなく、インターネットでオペラやホテルなどの予約を行って夫婦で出かけているようである。50代であった銀行マン時代に一人で初めての海外旅行に出て、一月ほどヨーロッパを回ったことがあるという。そのとき、フランスで手違いから無人車両に乗ってしまって外から鍵をかけられて、手動ブレーキで列車を止めたエピソードを持つと



いう。あの誇り高きフランス人の車掌を怒鳴りつけて、自分が乗るべきバスの停留所まで送らせたという。一見大人しそうで紳士然とした豊島さんにそんな一面があるのかと驚かされるが、チリ入国時のみかんで引っかけたときでもずいぶん粘っていた。英語力は、今回のわれわれのメンバーの中では一番マシとは言えるが、英語が話せるというには程遠く、完全なジャパニーズ・オトツアーン・イングリッシュである。ヨーロッパで、その英語さえ通じない

ところを巡っていたときが一番楽しかったという。やっぱりトップに立って人を引っ張って行く人の感覚というものはこのくらいでなければいけないのであろう。小心技術者の俺とはまったく違うが、まあ技術者は小心であるべきだという俺のポリシーだって捨てたもんじゃあないさ。

翌日はまた車に乗って移動である。南米らしく、グアナコの群れに何回も出会う。(ラクダ科の動物でリャマやアルパカと同類) ダチョウも自然に草を食んでいる。群れに出会う度に車を止めて写真タイムとなる。コンドルも飛んでいる。これも写真タイムになるが、飛んでいるやつはシャッターに捕らえることは難しい。目指すパイネ山系の奇岩の群れが望めるようになってきた。ペオエ湖を船で渡ってペオエ・キャンプ場へ着く。やっと本番開始である。

### 3. パイネ山系トレッキング

やはりトレッキングに来たのであるので、テントに寝袋の前夜の泊まりは俺にはフィットした。柏さんや豊島さんご夫妻は小屋のほうが良いよといていた。文化人とは意見が合わない。今回のトレッキングは高低差も少ないので気楽に楽しめる。天気も良く、現地ガイドのアレックスがゆっくりと先導してくれるので、まずは快適である。イタリアーノ・キャンプから北上して(南米の場合は北下かな?) フランセス氷河の麓



パイネ山群遠望



グアナコの群れ

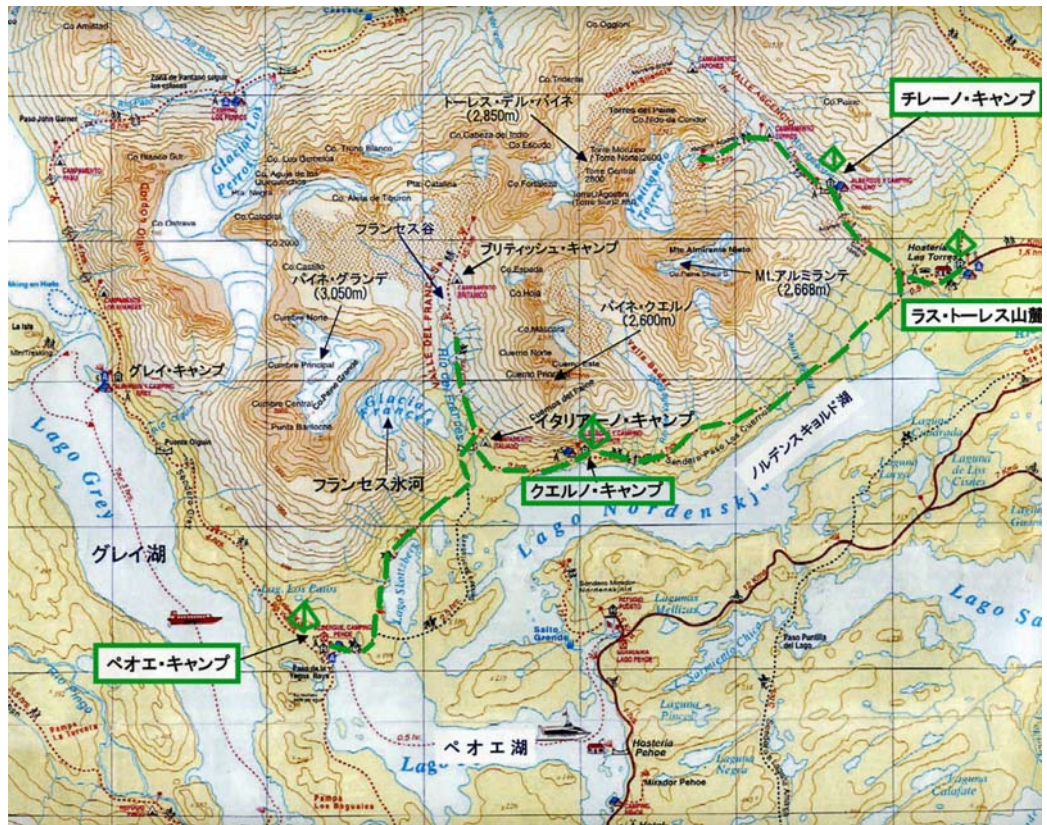


草を食むダチョウ



ペオエ・キャンプ場

まで行く。ブリティッシュ・キャンプやジャパン・キャンプなどの地名もあり、この山を目指した登山隊の名を地名としたのであろうか。西側はフランス氷河が押し寄せている。東側には奇岩のパイネ山系が連なっている。これがパタゴニアかと実感させられる。パタゴニアの名称の由来は、マゼランがグアナコの毛皮を



足につけた原住民を見て、パタ（足）ーゴン（大きな）と言ったのがきっかけとか。外国人のトレッカーもたくさん来ている。アレックスの話によると、ドイツ人をはじめとするヨーロッパ人が最も多く、アメリカ人もけっこういるみたいだ。たまーに日本人と韓国人もいるとのこと。チリの人に来るにはお金がかかりすぎると言っていた。イスラエル人も多いが、彼らは兵役を逃れるのが目的であるということである。そういえばヒマラヤでもキリマンジャロでもイスラエル人に出会った。またひとつ雑学を得た。



この日の宿泊地クエルノ・キャンプも前日同様に泊まりはテントであるが、食事は立派な小屋でとる。何にもしないで飯を食わせてもらえるのであるから、文句を言うてはいけませんが野菜が少ない。昼飯に配られたサンドイッチも、われわれ日本人ジーさんバーさんにはデカ過ぎる。半分にしてアレックスやロペスなどのガイドに食べてもらう。



トレッキング 2 日目は、安東さんの言によれば、湖に沿って平坦な道を歩くだけなので「今日は楽勝ですよ」と言っていたが、3 時間くらい

歩いたところで増水した沢に行き当たってしまった。アレックスと安東さんが渉れそうなところを探して先導してくれるが 5 箇所くらい渉らなければならなかった。われわれが水に濡れないように彼ら自身は水の中に足を浸しながらサポートしてくれる。ここを通過するだけで 1 時間以上を費やしてしまった。他の外人さんたちもここではみんな苦労していた。

われわれの荷物を積んだ馬が追い越していった。荷物を馬に持たせているのはわれわれくらいのもので、ほとんどの外人さんたちはテントなどを入れた大きなザックを自分で担いでいる。

アレックスの先導はゆっくりである上に休みも多い。“2minuts” といって休みに入るが、たいていは 10 分くらい休んでいる。豊島さんの体調が悪そうで休みのたびに横になったりすることが多くなった。

アメリカ人のお姉ちゃん 3 人組と抜きつ抜かれつしながら歩く。ヤンキー娘らしく陽気にぎやかだ。この日の宿泊地のチレーノ・キャンプに着いたら、先着していた彼女らが拍手で迎えてくれた。

トレッキング 3 日目はまずパイネの中枢部の『トーレス (塔)・デル (の)・パイネ』までの往復である。前日体調を崩した豊島さんはこの往復には参加しなかった。アセンシオ川沿いに登り、最後は急なガレ場だ。ロペス君が後から追掛けてきて、追抜きながらわれわれの写真を撮りまくる。どうせプリントアウトすることなしに消去するのであろうが、デジカメはこんなとき気楽だ。トーレス・デル・パイネの奇岩を十分に楽しんでます。アレックスや柏さんと記念写真に納まる。トレッカーが来られるのはここまでである。後は岩登り屋さんの世界だ。チレーノ・キャンプに戻った後はラス・トーレスの山小屋まで移動である。これでチリ・パタゴニアのトレッキングは終了だ。この晩は一段落ということでワインをしこたま飲んだ。



苦労した渡渉



チレーノ・キャンプ



トーレス・デル・パイネ

# アルゼンチン：パタゴニア

‘09年3月



パイネ山群から少し戻り、車でちょっと走るともうアルゼンチンとの国境である。チリのアレックスからアルゼンチンの女性ガイドに引き継がれた。濃い眉毛が額の真ん中でくっつきそうな美人である。メキシコ革命時代の女流画家フリーダ・カーロを髣髴させる。彼女の名前は忘れたのでアルゼンチンのフリーダと呼ぶことにしよう。2年前のインカでのカルメンを思い出して思わずニコッとする。10人乗りくらいの車の助手席からシート越しに振り返って上半身を乗り出していろいろ説明してくれる。胸がシートに押されてぐっと持ち上がる。

## 1. ステップと羊

このあたりの乾燥した地形をステップと呼ぶらしい。見渡す限り地平線である。こんなところに？と思うところにレストランがあって昼

食になる。羊を骨がついたまま半身にしたやつを、マキでじっくり半日くらいかけて焼く。ポタリポタリと油が落ちるさまを見学させてくれた。そして焼けたばかりがテーブルに乗った。しかし皆が喜んだのはチリではほとんど見なかった野菜が食べられたことである。昼食の後は羊の毛を刈る実演ショーの



見学である。毛を刈られる羊は気持ちよさそうに目を細めている。こんなにいっぺんに刈られたら風邪を引いてしまうのではないかと羊のために余計な心配をしてしまう。そして再び広大なステップの中をこの日の宿泊地カラファテを目指して走る。

## 2. ペリト・モレノ氷河

パタゴニアにはたくさんの氷河がある。このペリト・モレノ氷河もそのうちのひとつで、氷河の末端は湖に注いでいる。まずわれわれは船に乗って湖の上から

これを見た。この地方の氷河は、私が今まで見てきたヒマラヤ・ヨーロッパアルプス・ニュージーランドのそれとはちょっと違うようだ。これらの氷河はそれこそ数十万年前の氷河期にできたものが少しずつ融けながらそのまま残っているものと思われた。それに対してこのペリト・モレノ氷河は年に1~1.5m くらいのスピードで流れているという。つまりまだ現役の河なのである。だから時々ドーンという音を立てて、ダイナミックに湖に氷が落ちるようすを見ることができる。あいにくの雨であったが、それでも船室から外へ出てそのさまを見る。船から上がると、今度は湖の脇に付けられた見学用の長~い通路を歩いて上方からペリト・モレノ氷河を見る。実に迫力のある氷河で、もちろんここも世界中から観光客が来ている。

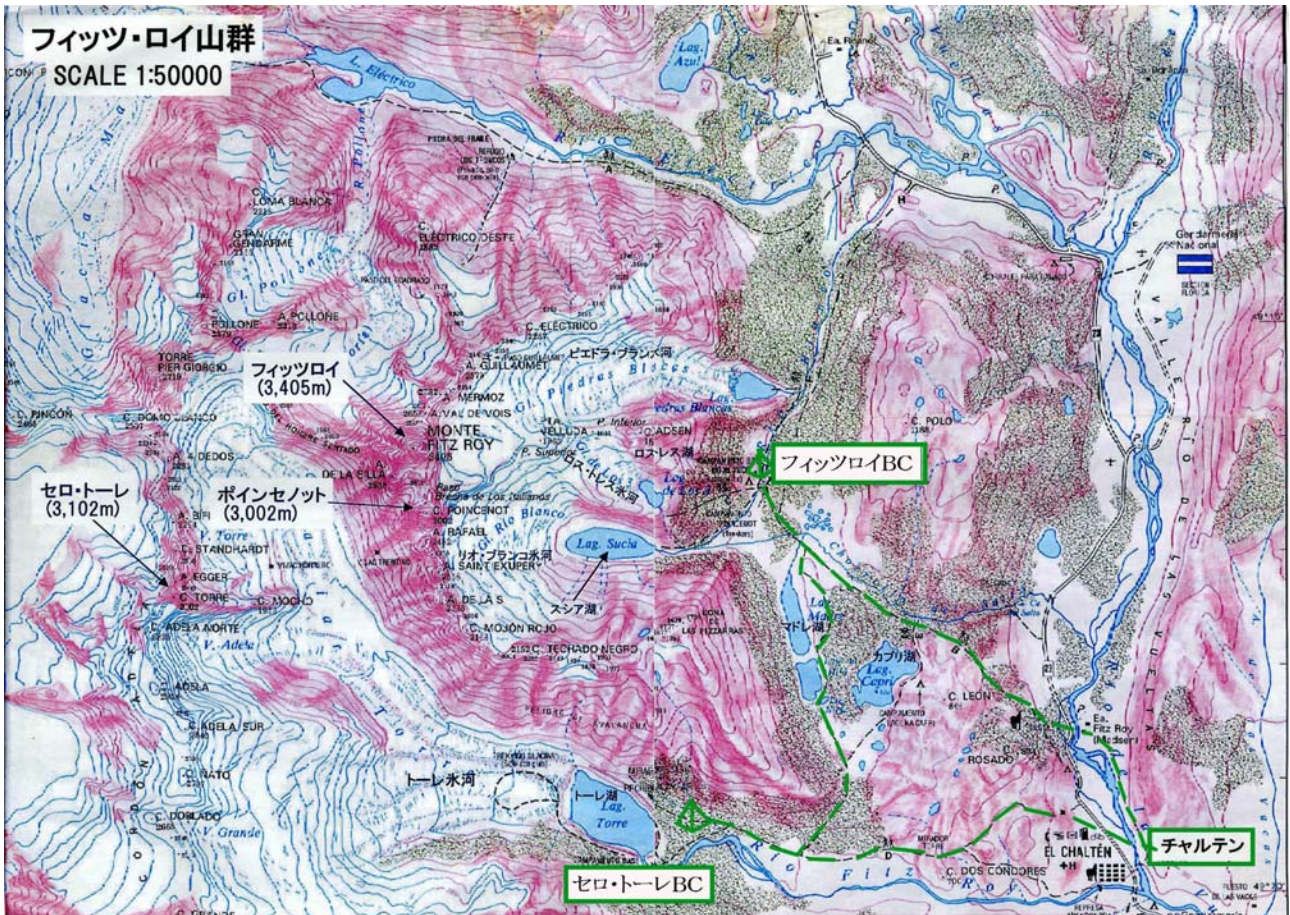


氷河見物観光船





## 2. フィッツロイ



主要都市までの距離表示



フリーダとフィッツロイの遠望

アルゼンチン：パタゴニアの観光拠点の町カラファテからトレッキング目的地フィッツロイ山群の拠点の町チャルテンへ車で移動である。途中川沿いの喫茶店に寄る。世界主要都市までの距離表示が出ている。東京は21 041 kmとある。ロンドンで13 754 km、ニューヨーク11 168 kmだ。日本を真ん中にした平べったい世界地図の感覚で考えると信じられないが、地球は丸いのだ。大西洋は太平洋より狭いのだ。ヨーロッパ人の観光客が多くて日本人が少ないこともうなずける。なおも延々と車はステップの中を走り続ける。フィッツロイ山群が遠望できるようになる。フリーダと一緒に記念写真に納まる。

チャルテンで車を降りると、いよいよアルゼンチン：パタゴニアの代表的トレッキングコースである

フィッツロイ山群へ入り込むことになる。

フリーダの観光会社の事務所で昼食をとっていると、フリーダがこれまでの嫣然とした営業スマイルを捨ててまじめな顔をして安東さんに対して交渉を始めた。われわれがポータに託す荷物が多すぎるからもっと減らせと言ってきた。このときのフリーダの顔は会社を代表して貴方と交渉をしているのですという、自分の権利を主張するときの西洋人のものであった。関係ないおばちゃんまで出てきてもっと減らせと言い、この袋に入れなおせと定型の袋をくれた。それなら最初からそう言えばそうしたのに、と多少ムツとする。馬かリヤマに持たせるのかと思ったら、頑健なカッコいいお兄ちゃんがわれわれみんなの分を一人で担いで行った。結局持ちやすい形にただけで、荷物の総量はそれほど変わったものではなかった。

フリーダは町中での案内役だけかと思ったが、トレッキングのガイドもフリーダの役割であった。胸グリのぐっと開いた黒のランニングシャツ姿である。しかし後でブエノスアイレスでも感じたことであるが、こちらの女性はけっこうこんな格好をしている人が多いが、残念ながら肌がきかない。だからそこに向かって目がテンになることはない。

この日の天気は上々であった。フィッツロイの異様な岩峰が聳え立つ。明日はこの真下まで行くのかと思うとわくわくする。この日のキャンプ地フィッツロイ BC に着く。便所は汚く、チリのキャンプ場のように小屋はなく、寒い中でのディナーになる。

メシは美味くはなかったが、ポータ役を担ったカッコいいお兄ちゃんがワインを抜いてくれる。これだけで昼間のトラブルに対するご機嫌は直ってしまった。

さて翌日、朝から雨でありフィッツロイの真下まで行くピストンは中止になってしまって、セロ・トーレ BC までの移動のみとなった。フリーダを先頭にして隊列を組んで歩く。全体に下り勾配であるので楽なものである。雨の中をしょぼく歩いていくと、後ろから追抜いていったスペ

イン系みたいなトレッカーのお兄ちゃんがフリーダに話しかける。先に行ってしまったかと思うと、いつの間にかまた出てきてフリーダに付きまとう。安東さんが頭にきたようで、“わずらわしいですね”といいながらフリーダに“君の仕事はわれわれをガイドすることだよ”と注意する。彼女はすぐに謝って、



次に先に行ったはずの彼がまた待っていたときには見向きもしないで彼の脇を通り過ぎてしまった。バカッツラをしてポカーンと立ちすくむ彼の顔を“ざまーみろ”という思いで、われわれも通り過ぎる。午後、時間が余ったのでセロ・トーレ湖まで散歩に出かける。フリーダがパタゴニアの氷河の特徴を説明してくれる。モレーンについても教えてくれた。砂の地面に靴をググッと踏み込んで砂を盛り上げた後で、ズズーと靴を引く。後には押し上げられた砂の土手が残る。すなわち氷河期に成長した氷河がその後の温暖化で後ろに下がり、これがモレーンであるとの説明だ。なるほど。これもヒマラヤなどとの違いがある。向こうは氷河が流れていった両脇に押し上げられた土でモレーンが形成される。こちらは氷河の行き先に立ちふさがる感じでモレーンが形成されている。フリーダの言葉による説明は難しくて分からないが、足による説明は明快でよく理解できた。

トレッキング最終日は、最初は厚い雲が立ち込めていたが少しずつ雲が退いていって、朝のモルゲンロート（雪の山が朝日に赤く染まるさま）とセロ・トーレの勇姿も僅かに覗えることができた。林の中では啄木鳥が真近で木を突付いているところを見ることができた。日本では音は聞こえてもこんなようすを目撃することはできない。このホームページの速報を見た古い山友達がこの1月に同じコースを歩き、そのときは毎日雨でまったく見えなかったと言ってきた。それに比べればまだマシだっ



セロ・トーレ湖



モルゲンロート



セロ・トーレ遠望

たと思うことにしよう。

### 3. 安東さんのプロフィール

今回のツアーリーダーを務めてくれた安東浩正さんは冒険家としてかなり有名な人らしい。自転車での冬期単独シベリア15 000kmで第8回植村直己冒険賞を受賞したことがあるらしい。主に自転車での単独走行をしており、著書に『冬季チベット高原単独自転車横断 6 500 キロ』（山と溪谷社）がある。詳しくは安東さんのホームページ



安東浩正ホームページより

ページ (<http://www.tim.hi-ho.ne.jp/andow/>) で見ることができる。インドを自転車で冒険旅行していたときに、中国人に間違えられて袋叩きに合い、大怪我をしたらしい。そのときの傷がもて今でも右手の小指が曲がったままであり短くなっている。それでもインド人は嫌いなどとは言わない。

“日本人だと分かってからは親切に病院に連れて行ってくれた”などと話す。アクシデントをいちいち怨みに思っているのは冒険家なんて勤まらないのかもしれない。熊に襲われて熊よけスプレーで逃れたときの話もしてくれた。そんな訳で冒険中は動物も怖い人間も怖いと言う。自転車ばかりではなく、無酸素での熱気球太平洋横断にも挑戦したことがあると言う。そのときは失敗して、片割れだった人はその後一人で再挑戦して亡くなってしまったそうだ。計画を立て直してまた挑戦するつもりらしい。こんな命知らずはどんな日常生活を送っているのかと思ったら、7歳くらいの娘の写真を肌身離さずに持っている。われわれから見るとすごい人であるのに、自分では普通の人と思っているみたいだ。

### 4. カラファテ

チャルテンまで戻ると、昼食後は再び飛行場のあるカラファテへの車での移動である。延々とまたステップを走る。その上に漂う雲までが日本では見たこともない形をしている。地形がなせる業か？

カラファテへ戻って町でみやげ物アサリをする。豊島さんご夫妻のCD購入にフリーダが付き合っているところに行き当たった。30年位前に加藤登紀子や長谷川きよしなどが歌って日本でもヒットした南米の歌『灰色の瞳』がかかっていたので、“この歌知ってるよ”と言ってフリーダに頭の部分を口ずさんでやったら、ナンタラカタラしゃべりだして何を言っているのかわからない。豊島さんに通訳してもらったら、“南米の歌は単調なメロディーが多い”などと言っているみたいだ。ただ“あら、そー”でいいのに。これもフリーダにし



ステップの上の雲

てみれば親切心なのかもしれないが、どうも波長が合わない。南米の女はインカのカルメンにかぎる。夕方からカラファテの町の裏山に、大型ランドクルーザーみたいなタイヤのお化けのような車で登った。カラファテの町とアルゼンチン湖が一望に見渡せた。



豊島さんご夫妻



大富豪の墓

#### 5. ブエノスアイレスとタンゴショー

いよいよこの旅行もフィナーレである。ブエノスアイレスに着くと、2年位前にここへ来たことがあると言う豊島さんの案内で街の見物に出かけた。豊島さんは非常に好奇心旺盛で、かつ記憶力がいい。ここでもトップとして人を引っ張る人の違いを見せつけられる。地下鉄の駅や大統領府などを見て回る。

最終日は昼が市内観光で、夜はタンゴショーである。市内観光はオプションということで\$150 もとられた。この旅行中総額で\$300 も使っていないので、半分以上でポツタクリだ。前日とラップしたところが多かったが、大富豪の墓地などにも行った。ペロン元大統領夫人のエビータの墓は人気が高い。日系のガイドの女性に映画『エビータ』の話をすると、ケンもホロロの答えであった。チャルテンでのフリーダも映画『エビータ』に関しては同様の反応であった。やはり国の英雄に対して、下着姿で歌を歌って人気を得たアメリカ人歌手のマドンナが主演であったことが気に入らないのであろう。

夜はアルゼンチンタンゴショーでこの旅行を締めくくった。



タンゴの街  
カミニートの看板の下で

